公安調査庁のチョンボ

死刑確定

官邸は知らぬ存ぜぬ

日本人4人がスパイ容疑で中国当局に拘束された問題で、6月に上海で拘束された元日本語学校幹部の50代女性が11月に正式に逮捕されていたことが、新たに分かった。菅官房長官が25日の会見で明らかにしたもので、6月に北京で拘束された元航空会社社員の70代男性も、「容疑が固まり次第、逮捕される見通し」（官邸事情通）だ。

5月に拘束された別の50代男性2人は9月に逮捕されており、これで逮捕者は計3人に。いずれ起訴され、法廷で追及される恐れがある。菅官房長官は「わが国はいかなる国に対してもそうした（スパイ）活動は行っていない」と改めて容疑を全面否認してみせたが、中国の法律ではスパイ行為の訪れていたことは確かです。

最高刑は死刑だけにシャレにならない。

「先に逮捕された2人は公安調査庁に近い協力者とされ、残り2人もそうだとみられていますが、4人とも諜報活動の訓練を受けていない素人だともっぱらです。いずれも頻繁に中国を出の官邸事情通）

が、そこに目をつけた公調が接触を図っただけで、協力者でもないという見方もある。何より問題は、接点のない4人がピンポイントで中国当局に拘束された事実です。要するに、公調の情報が中国側にダダ漏れだったということでしょう」（前公調のチョンボでスパイ

し、4人を日本たたきの〝カード〟として使うことはないでしょう。それに昨年11月に反スパイ法を施行し、中国は厳格に公正にやっていることを国内外にアピールしようとしている。日本との〝裏取引〟の材料に4人を使えば、それも合無しです。逆に言えば、日本政府は交渉の余地がないともいえますね」

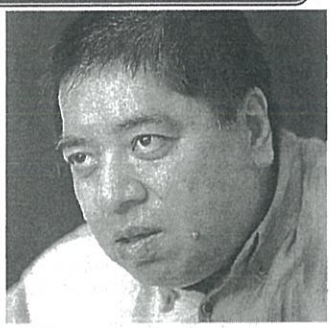
となると、4人はどうなるのか？

「〝一級機密〟が関わっているとは思えないし、麻薬

ビジネスマン必読

週刊オススメ本ミジュラン

選者 佐藤 優 作家・元外務省主任分析官



たしかに農業と出版業はよく似ている

里山産業論
「食の戦略」が六次産業を超える
金丸　弘美著／角川新書／2015年12月

サブタイトルに記された「食の戦略」だけでなく、現下の日本経済が持つ潜在力をどのようにすれば形にすることができるかについて具体的に論じている点が本書の最大の特徴だ。

例えば、書籍ビジネスについては、神奈川県藤沢市にあるパナソニックの工場跡地を利用した町づくりについて紹介している。

〈これまでの大型書店は、ほとんど駅前ビルに入っていた。デパ地下に料理の本があったり、婦人服コーナーにファッション誌があったり、家具のところにインテリアの本があったりしてもよかったはずだが、現在の出版流通だと、書店以外の店舗が個別に出版社から本を取り寄せることは難しい。返品できないため買い取りとなり、マージンも極めて安い。／ところが、Fujisawa SSTでは蔦屋書店が仲介に入り、書店を各店舗の中心に置くことで連携販売を可能にした。〉

確かにこのようなちょっとした工夫で、お客さんに本を手にとってもらいやすくなる。金丸氏は、出版業と農業は、構造的に似た点があると考えている。

〈書店も農業に似ている。大量生産をして出荷する、流通に乗せるという時代から、地域と連携をして、見せ方、使い方、文化との融合など、さまざまな組み合わせで、必要な人にほしいものを提供する時代となった。〉

出版不況という用語が業界に定着して久しくなる。作家、出版社、取次会社、書店の意識改革が強く求められている。金丸氏は、〈現在、書店は毎日一店舗以上がなくなっている。一九九九年には二万三九六店だったものが、二〇一四年には一万三九四三店となっている。〉と指摘する。

現実から目を背けてはならない。書店数が減少するとともに書籍マーケットも縮小していく。もっとも、それだからといって、書籍がまったく存在しない世の中にはならない。それだから、作家という職業がなくなることもない。しかし、作家も身を切るような改革に取り組まなくてはならない。現在、大出版社は、刷り部数に基づいて著者に印税を支払っているが、これを一部の中小・零細出版社が行っているように売り上げ部数印税に切り替え、売れずに断裁される本の数を減らす必要がある。

★★★

（2015年12月23日脱稿）

中国・山東省

石こう鉱山が崩落

19人が坑内に

新華社電によると、中国山東省臨沂市平邑県にある石こう鉱山で25日午前、崩落事故が発生し、19人が坑内に閉じ込められた。崩落の際にマグニチュード（M）4に相当する揺れが起きた。

事故当時は29人が作業中で、10人が救出された。

残る19人も閉じ込められた場所が確認され、救出作業が続いている。

山東省トップの姜異康共産党委員会書記と郭樹清省長がそろって現場で救出の指揮を執るなど、当局は事態を重視する姿勢を示している。

（時事、写真はユーチューブから）